



3階企画展・開催中

人間国宝 森口邦彦 友禪／デザイン— 交差する自由へのまなざし

2020年10月13日(火)～12月6日(日) ※会期中一部展示替えあり

友禪の技法で重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受けている森口邦彦。森口はパリで学んだグラフィック・デザインの思考と幾何学文様を大胆に組み合わせることで、伝統工芸の「友禪」に留まらない新しい創作の可能性を拓いてきました。着物制作から三越のショッピングバッグに代表されるデザインワークまで、森口の創作は、歴史的に積み重ねられてきた技と感性を出発点に社会に友禪・デザインを還元させるための実践であるといえます。

本展では、友禪とデザイン、伝統と現代、東洋と西洋などが様々な交差して生まれる森口邦彦の創作活動の全貌をご紹介します。

友の会情報：特別解説会の実施

日時 2020年11月14日(土) 18:00～
定員 先着25名
集合場所 当館1階講堂前
解説者 大長智広(当館研究員・展覧会担当者)

申込方法 お電話かウェブでお申し込みいただけます。
電話：075-761-4114 (京都国立近代美術館 総務係)
(平日 10:00～12:00 / 13:00～17:00)
ウェブ：当館ウェブサイト「お問い合わせフォーム」より
(件名は「友の会特別解説会申込み」としてください)
※お申込みの際、お名前・会員番号をお伝えください

森口邦彦《友禪着物「雪明り」》1969年、当館蔵
森口邦彦《友禪着物 緋綾文》2000年
森口邦彦《友禪着物 持合縹漸層文様「花間」》1970年
森口邦彦《カップ・アンド・ソーサー「実り」》2016年

分館派建築会100年
建築は芸術か?

2020年度第3回
コレクション展

キュレトリアル・スタディーズ14:
須田国太郎 写実と真理の思索



4階 コレクション展・開催中

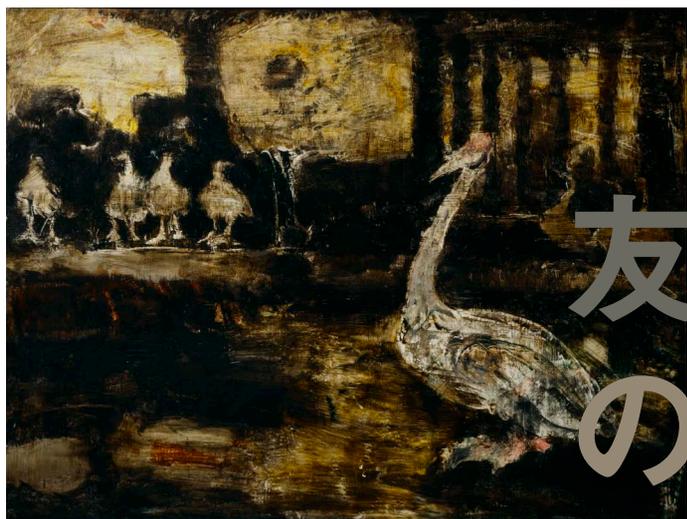
キュレトリアル・スタディーズ14: 須田国太郎 写実と真理の思索

2020年10月8日(木)～12月20日(日) ※会期中一部展示替えあり

京都洋画壇を代表する巨匠、須田国太郎(1891-1961)には、美学者・美術史家としての側面もありました。画家としては遅咲きだった彼は、世間からはむしろ学者と見られていた程です。少年時代から画家を志し、画家になるための勉強の一環として京都帝国大学哲学科で美学美術史を専攻した彼は、古今東西の美術を視野に入れながら、「写実」をめぐる思索を深め、美術史と美術史への理解を通じて、以後の自身の進むべき道を見定めたといえます。

今回のキュレトリアル・スタディーズでは、美と真理についての彼の思想の一端を振り返りながら、そのユニークな画業の流れを当館コレクションによりご覧いただけます。4階コレクション・ギャラリーで開催のため、友の会会員様は随時無料でご覧いただけます。ぜひお越しください。

須田国太郎《動物園》1953年 当館蔵



友の会

Topics [展覧会] 人間国宝 森口邦彦
友禪／デザイン—
交差する自由へのまなざし

Topics

4階 コレクション展・開催中

2020年度 第3回コレクション展

2020年10月8日(木)～12月20日(日)

4階では、今年度第3回コレクション展を開催中です。

日本画セクションでは、2020年3月をもって解散したパンリアル美術協会を特集します。その中で展示する田中竜児の作品は、修復を経て当館で初めて披露するもので、パンリアル展出品以来70年ぶりの公開となります。

また、「須田国太郎の周辺」では、須田がヨーロッパ留学中に親交のあった黒田重太郎や川端弥之助、里見勝蔵、川口軌外等、独立美術協会の小林和作や北脇昇、小牧源太郎等など、須田の画業をさまざまな形で支えた画家仲間たちの作品を紹介します。キュレトリアル・スタディズ14「須田国太郎

写実と真理の思索」とあわせてご覧ください。

今回も見どころたっぷりのコレクション展へ、ぜひお越しください。



河井寛次郎《鉄打薬切子扁壺》1940年

展示テーマ

西洋近代美術作品選

パンリアル美術協会解散によせて
なぜ芸術家はフランスを目指すのか？
模様の美

川勝コレクション 河井寛次郎作品選

須田国太郎の周辺

※同時開催

キュレトリアル・スタディズ14：須田国太郎 写実と真理の思索



上から、畠山直哉 (Atmos #07303) 2003年
都島英喜《セイヌ河》1919年
山崎隆《森》1949年
いずれも当館蔵

予告

3階 企画展

分離派建築会100年

建築は芸術か？

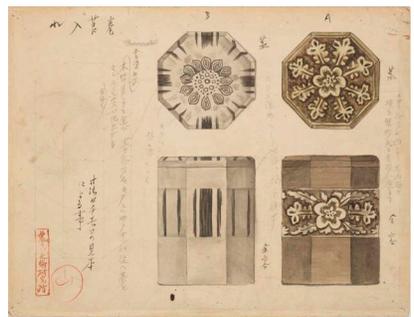
2021年1月6日(水)～3月7日(日)

大正時代、日本の建築界に鮮烈なインパクトをもって現れた新星たちがいました。日本で最初の建築運動とされる分離派建築会です。大正9(1920)年、東京帝国大学建築学科の卒業をひかえた同期、石本喜久治、滝澤真弓、堀口捨己、森田慶一、矢田茂、山田守によって結成され、その後、大内秀一郎、蔵田周忠、山口文象が加わり、昭和3(1928)年まで作品展と出版活動を展開しました。

結成から100年目の2020年。本展は、図面、模型、写真、映像、さらには関連する美術作品によって、変革の時代を鮮やかに駆け抜けた彼らの軌跡を振り返ります。分離派建築会が希求した建築の芸術とは何か。日本近代建築の歩みのなかで果たした彼らの役割を、新たな光のもとに明らかにしていきます。



滝澤真弓《山の家》模型 1921(大正10)年
再制作：1986年、滝澤真弓監修



上から、堀口捨己 紫畑荘 1928(昭和3)年『紫畑荘図集』(洪洋社)所収、東京帝国大学(蔵田文庫)
山本鼎「八角巻煙早入れ(農民美術デザイン画)」大正時代～昭和初期、上田市立美術館
山田守「東京中央電信局竣工」1925(大正14)年、写真提供：郵政博物館

京都国立近代美術館賛助会員

当館は右記、賛助会員の皆様からご支援・ご支持をいただいております。

<特別会員>

木下グループ FUJIFILM

<一般会員>

ワコール 京都中央信用金庫